

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (2)

『南京！ 南京！』

近 藤 泉

中国映画に描かれた日本像・日本人像は、中国の人々の日本・日本人についての見方を一定程度反映したものであるとともに、また、それに影響を与えてゆくものでもある。

本論文「最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について」は、2005年以降の作品を対象とし、中国映画は、どのように日本・日本人を描いているか、中国（大陸）の人々に日本・日本人についてどのような情報・イメージを与えるものとなっているか、といったことを明らかにするものである。

前回「最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)」¹⁾において、『非诚勿扰（狙った恋の落とし方）』（2008年度、大陸での興行収入が中国映画年第2位）『色・戒（ラスト、コーション）』（2007年度、大陸での興行収入が中国映画年第2位）二作品を取りあげたが、今回は、2009年度、大陸での興行収入が中国映画年第6位であった『南京！ 南京！』を取りあげることとする。また、南京大虐殺を扱った他の中国製フィルム（ドラマおよびドキュメント）の内容の紹介をもし、本作品とそれらとの間において、日本・日本人に対する描写の比較をもしてみたい。

南京！ 南京！ 陸川監督（129分） 2009年

日本軍の南京攻略に始まる南京大虐殺を描いた作品。

これは記録映画ではなく、膨大な記録を参考にしつつ制作されたドラマである。陸川監督は作品制作にあたり、膨大な数の日本兵の日記を読み、友人が日本で収集した膨大な数のモノクロ写真集を見た、と言っている。しかしあくまでもドラマであり、ラーベは実在の人物であるものの、それ以外は、後で述べる日本人、角川正雄・伊田修・大使館員富田などをも含め、基本的に記録を参考にしつつ作られた虚構の人物である²⁾。

なお、陸川監督は、2009年9月21日、スペインのサンセバスチャン国際映画祭の際の公式会見において、「私は何度も日中を往復し、ある元日本兵にもインタビューしたり、彼らが残した日記や膨大な数のプライベート写真などを徹底的にリサーチしたりした。」「私は元日本兵の日記を読んだ時、人間の心を感じたので、日本人を鬼畜として描きたくなかった。」などと述べており³⁾、この題材を撮りたい他の中国人監督と比べ、彼は膨大な数の日本兵の日記を読めたことが強みとなっており、それが単に鬼畜のようにのみ描いてはいないこの作品の日本人描写にも大きな影響を与えているということがうかがわれる。

スペインの第57回サンセバスチャン国際映画祭において、最優秀作品に与えられる「ゴール

デン・シェル賞」及び審査員賞（最優秀監督賞）・カトリック映画賞（シグニス賞）を獲得。

中国政府主催の映画賞「華表獎」においては、その全部門でノミネートされなかった。中日新聞2009年8月21日朝刊は、以下のように記している。「2009年8月20日の中国各紙は、このニュースを報じる一方、『論争を引き起こした懲罰』という意見を紹介。反日の気運が高まり、日中関係を損ねることを恐れた政府の配慮との見方もある。」

日本では現在のところまだ上演されておらず、日本語版も出ていない⁴⁾。そのため、見ていなくても内容がよくわかるように、以下に具体的に紹介・説明をしていきたい。

日本軍ないし日本人をどのように描いているか

日本軍（皇軍）のなすことは、狂気の限りといえるほどの理不尽さ、残忍さ、横暴さ。理性を欠いている。また、戦闘終了以降の中国人が、兵士をも含めて全く無抵抗で、愛国心や反日の感情に激昂するような場面も全くなく、（単に実際の行為の面だけではなく、）表情や話をする際の語気などをも含めて、日本軍に対し、（怯えることはあったとしても、）全くといってよいほど反抗的なところもない⁵⁾ので、それがますます日本軍の理不尽さや残忍さを際立たせている。

具体的には以下のような場面がある。

投降した中国軍兵士の大量殺戮。日本軍が、敗残兵500人ほどを数十人ずつ程度にまとめて、多くの機関銃による一斉射撃で銃殺したり、釘を打ちつけて閉じ込めて一斉に焼き殺したり、一斉に土の中に生き埋めにしたりする。

平民も次々に殺されていく。

日本兵が跪かせた平民を並べて後ろから一斉に銃殺したり、道を普通に歩いている平民をいきなり銃殺したりする。

安全区にいた平民の中国人も日本兵により次々に銃殺されていく。

安全区にある教会に、少なくとも数百人以上と思われる数多くの中国人が避難しており、そのほとんどすべては平民であり、女性・老人も多く、小さな子供もいた。日本兵が来ると、みな怯えて両手を上に挙げ、投降の意を示し、全く無抵抗だった。（敗残兵なのか、銃を持っている中国人もごく僅かに混じってはいたが、彼らも同様に両手を挙げ、全く無抵抗だった。）日本兵たちは、「どけ！」などと怒鳴りつつ荒々しく彼らを扱い、男たちをひとからげに縄で繋いで連行してゆく。夫など身内を取り戻そうとする女性たちを銃声で脅す。そしてまた、（中国兵が隠れていることを恐れてかとは思えるが、）数人で近くにあるドアに向かって一斉に乱射する。（隠れていた平民の若い女性たちが倒れ落ちてくる。）

日本兵に閉じ込められて一斉に焼き殺される平民もいる。

銃剣を持った多数の日本兵が、安全区の病院に、銃声を発しつつ押し入り、多くの中国人負傷兵を次々に殺害していき、彼らを庇おうとする外国人女性（名前は出てこないが、金陵女子文理

学院教授・南京国際赤十字委員会委員のミニー・ヴォートリン Minnie Vautrin であろう。)をも激しく殴り、外国人の看護婦・医者をも、乱暴に押し倒したり、乱暴に壁に押し付けて銃で脅したりする。

日本兵が、集団で平民の若い中国人女性を銃で脅して強姦する。(なお、中国人の若い女はみな断髪して男装するが、それでも日本兵に集団で襲われ強姦される。)日本兵が、策を弄して若い女性たちを安全区から外におびき寄せ、集団で笑いながらもあそぶように強姦することもある。

日本兵が武力を盾にした理不尽で横暴で威圧的な言葉で脅して、安全区にいる数多くの女性をむりやり慰安婦にして連れ去る。

無理やり連行して慰安婦(中国人慰安婦は15分2円で客と性交する。なお、日本人慰安婦は一人しか登場しないが、日本人慰安婦の場合は15分5元。)にした中国人の平民の若い女性を、客の日本兵が非人間的に乱暴に扱う。

慰安婦の数多くの死体が、人力車に全裸のまま、まるで廃棄物のように積み上げられて、運び出されていく。

日本兵が平民の小さな女の子を窓から投げ捨てて殺す。

良民登記の際、日本軍が、自首すれば安全も生活も保障するとだまし、自首してきた中国兵たちを殺害する。

すさまじい廃墟の町において、以下のような光景も見られる。

柱や柵に縛りつけられて殺されている多くの中国兵の死体

殺されて吊るされている多くの中国人兵士の死体

吊るされた数多くの頭

地面に転がる多くの中国人平民の死体(中には若い女性の全裸死体もある。)

平民の若い女性たちをひとからげに縄で繋いで、非人道的に非常に乱暴に連行してゆく日本兵
自分たちのものにしようと、廃墟の中から価値のあるものを集めて運び出す日本兵

日本軍は、基本的に狂気のかぎりというほど残虐で横暴。登場する角川の上官の隊長伊田などもまさしくその典型。それ以外の日本兵も、みな正義感や良心に欠き、残忍に見える。強姦を止めようとする日本兵などいない。殺戮をためらう日本人もいない。

ただし、例外も全くないわけではない。

日本人兵士のうち、一人だけはかなり異質な描かれ方をしている。それは角川正雄である。

角川正雄ら良心的な日本人について

1 角川正雄(および一人の若い日本兵)について

角川正雄は、上官伊田修のもとで任務についている。

そもそもこの映画は、角川が日本軍の包囲する南京の城壁外の塹壕で目を覚ます場面から始まり、彼が二人の中国人の命を救って終わるのであり、彼はこの映画における極めて重要な人物で

あるといえる。

最初、彼は他の日本兵同様、まともとはいえない行為をしている。

むろん、中国兵との戦闘は、格別疑問を抱くこともなく、他の日本兵と全く同様に戦う。

廃墟となった店に残されていた商品の瓶入りの飲み物を、仲間とともに「うまい！」と言って飲む。

安全区にある教会に多くの中国人（そのほとんどが平民だが、ごく僅かに銃を持っているものも混じっていた。）が隠れていたのを発見した際、そこにいた中国人がいかに多数であったとはいえ、彼らがみな両手を挙げて無抵抗だったにもかかわらず、角川は上官の隊長に命じられて、外に援軍を呼びに行く。彼は怯えもあったのではと思われるが、思いきり走って、息も絶え絶えになりつつ、さながら気が触れてでもいるかのように、「支那兵だ！」「支那兵がいるぞ！」などと、大声で繰り返し繰り返し叫びまくる。教会に戦闘意欲の残っている中国兵がいるかどうかを確かめもせずに（冷静に普通に見ると、教会にいたのはそのほとんどすべてが無抵抗の平民であるようにしか見えない。）「支那兵」と叫びまくって援軍を呼ぶ彼の姿は、それが怯えのせいであっても、おそらくほとんどの中国人から見ると、理性・まともさを失った残虐な日本人としか見えないであろう。

教会に戻った彼は、ドアの後ろに中国兵が隠れているのではと恐れたようで、全く尋ねも確かめもせず、仲間の日本兵数名とともに、突然ドアに向けて一斉に銃を乱射する。隠れていた平民の若い女性たちの死体が、ドアの裏から倒れ落ちてくる。中国人の嗚咽の声が聞こえる中、彼は、呆然として「わざとじゃない」と言い、ほとんどその場に崩れ落ちそうになる。懷から小さな箱を取り出す（自殺するための薬を入れた箱であろう。）。彼は、ここで心に深い痛みを感じただけ一人の日本兵として描かれている。しかし、仲間の若い日本兵に引っ張られるようにして、ひとこと謝ることすらなく、そのままその場から連れ去られてしまう。

角川は、他の日本兵とともに、中国人たちの世話を焼いていた若い女性教師（安全委員会委員）姜淑雲の部屋に在宅捜索で押し入った時、彼は十字架のネックレスをくれと彼女に言う。それをもらおうと「謝謝」と言う。粗野で横暴な他の日本兵と比べると、物腰も言葉づかいも、比較的丁寧で礼儀正しいが、それでも拒否できぬ状態の姜淑雲からネックレスをもらっている。

彼は一人の日本人慰安婦（百合子）を好きになることを契機に、大きく変わる。

彼はある時、客として日本人慰安婦百合子のもとを訪れるが、彼は純情で初々しいところがあり、人間味のあるところを見せる。百合子の方から見れば、彼は感じがいいとはいえ、多くの客のうちの一人にすぎないが、彼はその百合子を、妻としたいと思うまでに好きになる。百合子のもとを二回目に再び客として訪れる角川は、食べ物・お菓子・酒のプレゼントをもって百合子のもとを訪れ、誠実に、また心の底から好きな恋人にでも接するように、彼女に接する。

後、百合子によく似て見えた中国人女性（江香君）が慰安婦として他の日本兵と性交している場に居合わせる事となり、そのとき彼は複雑な表情を見せ、目を背け、考え込むようにしてそこを立ち去る。おそらくこの頃から、彼は日本兵の非人間的な行動に対し疑問を感じ、戦争の犠牲者に対して同情するようになっていくと思われる。

それより更に後、例の中国人慰安婦（江香君）の死体が、他の慰安婦の死体とともに、裸のまま人力車に積み上げられて慰安所から運び出されるのを見、その場に立ち尽くすように、運び出される死体を見送る。彼の動揺がその表情から見てとれる。

無理やり連行してきて慰安婦にした中国人女性を銃殺したばかりの上官の隊長（伊田）が、みずから銃殺した慰安婦のことをあっさり、「きれいな人だな。生きているよりいいだろ。」と言うのを角川は聞いて、明らかにその表情は残酷な上官に対する憤りを見せている。近くにいる慰安婦にされた中国人女性を見た時、その表情は明らかに何か考え込んでいる。彼は一人になってから、苦しみのあまり、ただ「わー、日本に帰りたい！」と大声で叫ぶ。

中国人の平民の男たちが連行され殺されようという時、何人かの外国人が、家族のいる中国人を助けるよう角川の通訳を通して隊長に求めると、角川は、「あの中において家族のいる者は出して差し上げろ」と若い兵士たちに言う。中国人に対し乱暴な言葉づかいをする他の日本兵とは明らかに異なる、この中国の人々に対する丁寧な言葉づかい一つにも、彼の気持ちが表れているように思われる。

彼はその後、姜淑雲が日本兵のもてあそびもの（慰安婦か。）になりそうなことを知り、彼女の願いを聞き入れ、連行される彼女を銃で撃ち殺す。

彼はまた、慰安所に行き百合子のもとを訪れるが、彼女がすでに病死したことを知り、妻として葬ってくれるよう頼む。

彼は最後、若い日本兵と二人で処刑するために連行していた二人の中国人（大人の男と男の子。順子と小豆子。）を、郊外の野原で逃がし救う。若い日本兵と別れ、そして泣き、拳銃で自殺する。

最後に角川と一緒にいたこの若い日本兵は、涙を抑えた声で彼の名を呼び、角川に向かって、心の底からの敬意を示す深深とした敬礼をしてから、彼のもとを去って行く。実はこの日本兵も、目立たぬが良心を持っていることをうかがわせる日本兵である。

2 富田について

脇役にすぎないため角川と違いほとんど注目されることがないが、厳密に言うと、目立たぬが良心を持っていることをうかがわせる日本人は、実は更にもう一人いる。富田という英語・中国語のできるインテリの日本人（大使館員）が数回、いずれも僅かの時間ずつながら登場する。彼も、軍に反抗はできぬながら、良心を持っていることが見てとれる人物である⁶⁾。

①1時間7分の箇所：行軍する日本軍の前を、ラーベの秘書の唐天祥を日本軍の司令本部まで連れて行く場面。富田は、軍人とは違い、礼儀正しく感じよく、行軍する日本軍により唐天祥がひどい目に遭わぬようにと気をつけている。

②1時間10分の箇所：唐天祥が日本軍により無理やり慰安所設置に署名させられる場面。富田は、日本の軍人に合わせてうわべでは仕方なく拍手しつつも、その表情からは、明らかにつらそうに、あるいは申し訳なさそうに思っている様子がうかがわれる。

③1時間15分の箇所：武力にものを言わせて慰安所設置を要求する日本軍と安全区国際委員会との間に入り通訳をする場面。富田は、淡々と通訳をするだけであるが、軍人のように横暴ではなく、また、その表情からは、両者の間で困惑している様子がうかがわれる。

④1時間19分の箇所：安全区国際委員会の（おそらくそうであると思われる。）人々が、安全区の中国人女性たちの前で、日本軍の慰安婦への志願者が必要であることを告げる場面。富田はとてつらそうな（あるいは日本軍の行為に憤っているのかもしれない）表情で黙って立っている。志願した女性たちが軍によって連れ出される際も、とてつらそうな、気の毒そうな表情をしている。

⑤1時間24分の箇所：大使館における場面。富田は、ラーベに、唐天祥の義妹が日本兵に連れ去られたので捜すのを手伝ってほしい、唐天祥の娘は日本兵に殺された、と言われ、心の底から申し訳ないという表情と声で、唐に謝る。

⑥1時間35分の箇所：ラーベが南京を出る場面。南京に居残ろうとする唐天祥に対し、日本兵の聞き取れない中国語で、ラーベとともに南京を出ることを勧めて、唐の命を救おうとするが、伊田に「何やってるんだ！」と言われてしまい、やや怯えたような、困ったような、心配そうな表情を見せる。

いずれの登場場面でも、彼が良心を持っていることがうかがわれる。しかし、彼は、実際の行為の面から言うと、軍の横暴を抑えることも軍に異議を唱えることもできない無力な存在である。彼は登場時間も僅かであり、しかも彼の登場するそれぞれの場面の出来事そのものや他の登場人物の印象があまりにも強烈なため、映画を見るものの注意がそちらに向いてしまい、彼が映画を見るものの記憶や印象に強く残ることは、まずないであろう。

なお、日本軍・日本兵が横暴で残虐であった中で、日本大使館の大使館員は、実際に比較的良心的だったようである。そのことは、外国人の残した記録からうかがい知ることができる。（そしておそらく彼らが富田のモデルになっているのであろう。）

この映画の重要な登場人物の一人でもあるラーベも、その日記に以下のように記している。「日本大使館の役人はわれわれの立場をもう少しましなものにしたいと思っているようだ。だが、同じ日本人同士でも、こと軍部が相手だと齒が立たないらしい。すでにわれわれの耳に入っていることだが、軍部は日本—中国委員会を認めようとしない。これは、日本大使館が設けたもので、ちょうど我々の委員会のような性格のものだ。初めてここへ来たとき、いみじくも福田氏がいていた。『軍部は南京を踏みにじろうとしています。けれども、我々はなんとかそれを防ぎたいと考えています！』残念ながら、福田、田中、福井のだれひとり、軍部の考えを変えさせることはできなかった！」⁷⁾

また、ジェームズ・H・マッカラム（James H McCallum）も、以下のように記している。「私たちのことを丁重に扱ってくれる、たいへん気持ちのよい日本人もいることはいるが、他はおしなべて随分と残酷で、なぐったり、ぶったりするのを見ると恐ろしくなる。リグズがいちばん被害にあっている。たまに中国人を助けたり、中国人の赤ん坊をあやしたりする日本兵を見たこともあるにはある。戦争は好きではない、家に帰りたい、と私に言った兵士も一人や二人ではない。

日本の大使館員は誠意があって、私たちの援助をしてくれようとするが、どうにも無力だ。良識のある兵士はめったにいない。」⁸⁾ 更に、ミニエ・ヴォートリン (Minnie Vautrin) も、例えば以下のように記している。「わたしは……日本大使館に乗り込んだ。そこで、わたしたちの困難な体験のこと、また金曜日の夜の事件のことも報告し、そのあと、兵士たちを追い払うために持ち帰る書面と、校門に貼る広告文を書いてほしいと要請した。両方とも受け取ることができて、ことばでは言いあらわせないほど感謝しながら戻ってきた。(大使館の) 田中氏は物わかりよい人で、『心を痛めていただけに、自らも出向いて、憲兵二名に夜間の警備をさせるつもりだ』と言ってくれた。」⁹⁾

残虐・横柄な日本軍人の典型伊田修について

角川の上官である隊長。極めて残虐，横暴，卑劣で，強烈な印象を残す人物である。

以下はその行為の例である。

部下の日本兵を連れ、集団で安全区にある平民のいる場所に押し入り、平民の若い女たちを強姦する。

武力を盾にした理不尽で横暴で威圧的な言葉で脅して、安全区にいる数多くの平民の女性を、むりやり慰安婦として連れ去らせる。

無理やり連行して慰安婦にした怯えている中国人の平民の若い女性を乱暴に扱い、荒っぽく押し倒したり、饅頭を渡して彼女がそれをかじると、それを力ずくで取り上げて荒っぽくキスをし、自分のキスが嫌がられると、「笑え」と言って、平手で一度ならず彼女を殴り、むりやり性交をしたりする。

無理やり連行してきて慰安婦にした中国人女性をみずから手で銃殺し、その慰安婦のことを角川に、「きれいな人だな。生きているよりいいだろ。」と言う。

ラーベの秘書で中国人のために尽くしていた唐天祥（彼は中国人を日本軍から庇い救おうと必死に尽力したが、日本軍に対しては低姿勢で臨みつつ中国人を守ろうとした。日本軍の理不尽で無理な要求を断ろうとすることはあっても、日本軍に対し反抗的な態度をとったりすることはなかった。）を処刑させ、その処刑場で、処刑される直前の唐に対し、事もなげに、「人間はいつか死ぬんだよ。いい天気だなー」と言う。

命がけで中国人の命を救おうとする姜淑雲を連行させ、その際に彼女に「もうラーベもきさまを救うことはできないぞ。仲間も喜ぶだろう（つまり慰安婦にしたり、性的に犯したりすることができる、ということをほのめかしているのだろう。）」と言う。

まさに日本軍の残虐さ、横暴さ、粗暴さを体現したような人物として描かれているといえる。中国人が憤りを感じる日本兵の典型ともいえよう。日本軍・日本兵は、基本的にはこのようなものとして描かれていると言ってよい。

ただ、この伊田でさえ、100パーセントまるごと残虐で横暴な人間として描かれているわけではない。98パーセントはそのような人間として描かれており、映画を注意して見ていないと、

それ以外の印象はなかなか残らないかもしれないが、ごく僅かながら、彼の人間的な部分も描かれていないわけではない。

例えば、以下のような場面がある。

①長江のほとりで、角川が、腰掛けた伊田の体を洗っている。そこでは戦闘とは全く違う、のどかな、人をほっとさせるような時間が流れている。伊田：「鍋が食いたいな」。角川：「鍋いいですね。あと、芋の煮ころがしが食べたいです。」伊田：「おまえの母ちゃんの煮ころがし、うめいもんな。母ちゃん喜ぶぞ。おまえもうすぐ昇進だ。上が言っていた」。角川：「自分ですか」。伊田：「本たくさん読んでいてよかったな」。

ストーリー全体の運びの中で、これは必ずしも必要ではない場面のはずである。それにもかかわらずこうした場面が挿入されているということは、監督が、中国人に対しては残虐で横暴な日本兵も、完全に人間性を失っているわけではなく、日本人同士では非常に人間的であったということを示す場面を挿入しようとしたからであろう。あるいは、言い換えるならば、監督は、日本兵も人間性が全くないというわけではないが、しかし戦争という状況の中で彼らが狂気のように残虐に、横暴になっている、ということを伝えようとしたのではないだろうか。(なお、この映画には、日本兵がのどかに歌を歌ったり、スポーツをしたりする場面も、僅かだが存在するが、それもおそらく同様の意図で挿入された場面であろう。)

②部下たちに唐天祥を処刑させる前述の場面で、伊田は口では何事もないかのように「ここはきれいな場所だなー」と言いながら、いざ唐が処刑される際には、それをまともに正視することができず、処刑の場に背を向ける。その時の彼の表情は、明らかになにがしかの動揺かショックを感じていることを表している。彼は唐天祥の銃殺の終わった後も、やや考え込むかのように一人そこに残る。

③映画のほぼ最後で、伊田が屋外の水辺で一人風呂につかっている。これは見ている者をほっとさせる非常にのどかな光景であり、この場面を見るかぎり伊田が根っからの悪人とは思えない。

なぜ監督は、この映画において、伊田を100パーセント完璧に残虐な人間として描き通すことをしなかったのだろうか。②については、あるいは、みずからの命を犠牲にして中国人を庇い救おうとした唐の崇高さ、気高さを強調するため、その処刑が、残虐で非人間的な日本人兵士の心をも動揺させたことを描こうとしたという面もあったのかもしれない。ただ、監督は、映画製作中に、「人間性を失わせる戦争の極限状態を(映画『南京！ 南京！』で)描きたいんだ」¹⁰⁾と述べている。監督は、日本兵は戦争の極限状態で人間性を失い狂気に陥っているが、しかしそうとはいえ、一片の良心もなくしているというわけではなく、やはりそれも映画に描きこまないわけにはいかない、と考えたのではなかろうか。

抗日戦争を描いた中国映画および『南京！ 南京！』における日本人兵士の人間性の描写について

伝統的に、抗日戦争をテーマとした中国映画において、日本の兵士の正義感やよい意味での人

間味といったものが描かれることはなかった。例えば、『新儿女英雄传』(1951)『鸡毛信』(1954)『平原游击队』(1955)『铁道游击队』(1956)『地雷战』(1962)『自有后来人』(1963)『苦菜花』(1965)『地道战』(1965)『浴血红马车』(1991)『敌后武工队』(1995)『一个和八个』(1995)『太行山上』(2005)をはじめ、大陸の伝統的な抗日映画の主流は、日本軍は残虐な敵であるが、中国人民が共産党のもとで勝利するというタイプのものである。むろん大陸にも、『血战台儿庄』(1986)のような、国民党軍が日本軍に勝利を収めることを描く抗日映画も存在しないわけではない。しかし、それらにおいても、日本軍が単なる悪役の敵にすぎないことに変わりはない。いずれにしても、中国の抗日映画においては、極めて長い期間にわたって、善悪が非常に明確に描き分けられ、日本人の人間味や正義感といったものが描かれることはなかったといえる。また、それらの映画は、英雄的な抗日の戦いをたたえ民族意識を高揚させる類の映画であり、戦争の悲惨さを訴える映画ではなかったともいえる。

抗日をテーマにした映画ではないが、非常に有名な映画である『红高粱(紅いコーリャン)』(1987)にも、日本軍の暴虐非道さ・残虐さが描かれている。日本軍が村にやってきて、村人たちにコーリャン畑を踏みつぶさせ、中国人の肉屋に、抗日分子になっていた盗賊を生かしたままその皮を剥ぐよう命じる。肉屋はそれを免じてもらおうとするが、日本軍人は許さない。言う通りにしなければ肉屋の腹を割くと脅す。肉屋はしかたなく、抗日分子を苦しめずにひと思いに殺そうとする。抗日分子は死ななかったが、怒った日本軍は肉屋を射殺し、酒屋のかつての番頭に抗日分子の皮を剥がせる。やはりこの作品においても、日本人の(よい意味での)人間味や正義感といったものは全く見られない。

『晚钟(晚鐘)』(1987 呉子牛監督)は、敵である日本軍兵士の思い・苦しみにまで踏み込んで描いた作品であり、日本兵のある意味での人間味が描かれている。その意味で非常に画期的な作品である。1945年、戦争終結後、八路軍は洞窟に日本兵が多数潜んでいるのを発見する。彼らは食べ物も尽きて、絶望的な状態だった。八路軍は洞穴を包囲して日本兵の出撃に備えるとともに、日本兵捕虜を使い、日本の降伏を知らせ、食糧の用意もあることを告げ、投降を呼びかける。日本兵が下士官に引き連れられて洞穴から出てき、争って食糧を食べ始める。その時、彼らに捕えられていた中国人女性たちが突然、洞穴から飛び出してくる。降伏したかと思われた日本軍将校が銃を構えて女性たちを殺そうとする。彼らは中国人女性を凌辱していたのだ。日中両軍に緊張が走り、日本兵は食糧を手放し洞窟へ戻る。その夜、日本軍兵士の歌う「荒城の月」が聞こえてくる。翌朝、将校は自決、他の兵隊は投降する。気の触れていた下士官は洞穴の爆薬に点火する。しかし、この作品も、日本兵士の悲劇や苦しみを描いているとはいえ、その正義感やよい意味での人間性を描いているというわけではない。

日本兵の人間性が描かれている作品としては、『鬼子来了(鬼が来た！)』(2000 姜文監督)などもある。この作品において、村人馬大山は、ある時謎の男から、日本軍軍曹花屋と通訳の入った2つの麻袋を無理やり預けられる。馬たちは長老たちに相談し、二人を隠して預かることにする。花屋は捕虜になった恥から早く殺せとわめき、また村人に暴言を吐くが、通訳が故意に意味を変えて村人に伝えるので、村人は花屋の話している言葉の内容を誤解している。日本軍の目を

恐れて二人を預かって半年経つうちに、花屋は村人に感謝する気持ちになってゆく。自分を送り返してくれたら穀物を進呈するように日本軍に掛け合うと提案する。こうして花屋と通訳は日本軍に送り返されるが、酒塚隊長は捕虜になって生還した花屋を叱責し彼に体罰を加える。彼は花屋を送り返してきた村人に対しても、強い猜疑心と敵愾心とを抱いている。しかし表面上は、約束通り穀物を馬たちに送るよう、指示をする。村人と日本軍兵士との間で宴会が開かれる。やがて日本軍による村人の殺戮が始まる。生き残った馬が、戦争に敗れ捕虜となった日本人兵士への復讐に失敗、国民党軍の命令により花屋が馬を斬首する。この作品においては、捕虜となった日本兵花屋が、兵士とはいえ普通の人間だということをうかがわせ、その意味において彼の人間性が描かれている。しかし、彼にしても、やはり良心や正義感といえるほどのものをもっているわけではなく、最終的には、命令を受けてとはいえ、強い罪悪感やためらいの表情も見せずに、世話になった中国の農民を殺してすらいる。(無論、この映画に酒塚隊長のような残忍で狡猾な日本人兵士が登場することは、いうまでもない。)

『晚钟(晩鐘)』や『鬼子来了(鬼が来た！)』は、抗日の戦いをたたえたり民族精神を高揚させる映画ではなく、むしろ戦争の否定的な面を伝えようとした映画といえ、またある意味での日本兵の人間味が描かれた作品ともいえる。こうした映画も、珍しくはあるが、『南京！ 南京！』以前にすでに存在していたといえる。ただし、こうした作品に正義感や立派な人間性を備えた日本兵が登場するわけではないことは、上に述べたとおりである。

『南京！ 南京！』は、前に述べたように、人間性を失わせる戦争の悲惨性を認識したうえで制作された作品であり、また、日本兵士の正義感やよい意味での人間性が描かれた作品でもある。

陸川監督は、2009年9月21日、スペインのサンセバスチャン国際映画祭の際の公式会見において、「私は何度も日中を往復し、ある元日本兵にもインタビューしたり、彼らが残した日記や膨大な数のプライベート写真など、徹底的にリサーチした。」「私は元日本兵の日記を読んだ時、人間の心を感じたので、日本人を鬼畜として描きたくなかった。」などと述べている¹¹⁾。この映画が戦時中の日本人の人間性を描いているのは、先行する何らかの作品の影響というよりは、やはり、監督が真実を描こうとするなかで、様々な歴史的資料を見て、日本人の人間性も描く必要があると考えた結果であろう。

なお、『梅蘭芳(花の生涯 梅蘭芳)』(2008年陳凱歌監督)においては、任務と良心との葛藤に苦しみ最後自殺する日本の軍人(田中少佐)が描かれており、この点『南京！ 南京！』に似ている。これらは民意の多様化の中で、従来からの被害者の立場からの固定した唯一の戦争観以外の新たな戦争観が中国に生じてきている、ないしは中国の一部に定着しはじめてきていることをうかがわせるものでもあろう。ただし、『梅蘭芳(花の生涯 梅蘭芳)』の田中少佐には、梅蘭芳・京劇を中国支配のために利用しようとする側面もまたあり、中国支配などということも考えず、ただ慰安婦や中国人のために心を痛め、最後中国人の二人を救うために自殺する(もっとも、愛する百合子が死んだということが自殺を決意する前提となったのであるかもしれないが。)角川は、田中少佐など以上に良心的かつ優しい人物に描かれているように思われる。

日本軍の南京占領式典についての描写について

陸川監督は、セバスチャン国際映画祭での公式会見の式場で、記者からの「どこまでが真実で、どこまでがフィクションなのか？」との質問に対し、「この映画は企画の立ち上げから完成まで4年かかってます。その間、私は何度も日中を往復し、ある元日本兵にもインタビューしたり、彼らが残した日記や膨大な数のプライベート写真などを徹底的にリサーチしました。なので、あくまで真実がベース。唯一、フィクションがあるとすれば映画の後半、南京を政略した日本兵たちが儀式をするシーンのみ。あれは（天皇を崇める）メタファーとして取り入れました」と答えている。

では、その南京占領を祝う式典はどう描かれているだろうか。（少なくともおそらく今の日本人から見て、）いかにも古臭く、時代がかかっていて、異様なものに見える。少なくとも筆者はそう感じた。この場面を見た中国人（日本人以外の者）の多くは、日本が（むろんマイナスの意味で）異質な（「異様な」というべきか。）国だということを強く感じるであろうと思う。

この式典の場面は、天皇を崇める日本を描く意味があったというが、実は、南京入城の式典は1937年12月17日に現実に行われており、ニュース映画・ラジオ・新聞・雑誌を通し、日本でも非常に大々的に報道されている¹²⁾。実際のところ、映画における描写は、史実と比べてどうであろうか。

実際の式典の様子は、松井石根大将の陣中日記によると、「中山門より国民政府にいたる間両側には両軍代表部隊、各師団の指揮のもとに堵列、予はこれを閲兵しつつ馬を進め、両軍司令官随行す。未曾有の盛時、感慨無量なり。午後二時過ぎ国民政府に着、下関より入場せる長谷川長官と会し、祝詞を交換したるのち、一同前庭に集合、国旗掲揚式につづいて東方（つまり東京の皇居：近藤注）に対し遥拝式をおこない、予の発声にて、大元帥陛下（天皇：近藤注）の万歳を三唱す。感慨いよいよ迫りついに第二声を発するをえず、さらに勇気を鼓舞して明朗大声に第三声を揚げ、一同これに和しもって歴史的式典を終了す。」¹³⁾といったものであった。映画においては、そこまで明確で目立った天皇崇拝の式典とはなっていない。実際の天皇崇拝実際の式典をそのまま描いた方が、よほど明確に、日本を批判的に、つまり遅れた異様な天皇制軍国主義国家として描くことができたように思われる。皮肉なことに、当時の現実の日本は、場合によっては監督の想像を超えるほどの天皇中心の軍国主義国家であり、映画のこのシーンは、日本を実際のそれ以上に痛烈に批判するものとはなっていないといえそうである。

この映画は何を描こうとしたのか

この映画は、日中戦争をテーマにした戦争映画であるので、当然、日本軍・日本兵の残忍さ、横暴さが際立つ作品である。これを見て日本や日本人に憎しみを感ずる中国人は多くいても、日本を好きになる中国人はまずいない、ないしは極めて少ないのではないと思われる。

しかし、そもそも、南京において日本軍・日本兵が無数の残忍な行為をしたということは、否

定しようのない確かな事実であり、日本人の遺した資料ですら、それを裏けるものは多い。例えば、そのうちの一部の例を挙げると、岡村寧次中將は、その回想録において、「上海に上陸して一、二日の間、先遣の宮崎参謀、中支那派遣軍特務部長原田少将、杭州特務機関長萩原少佐等から聴取したところを総合すれば、次のとおりであった。一、南京攻略時、数万の市民にたいする掠奪強姦等があったことは事実である。一、第一線補給部は給養を名として俘虜を殺してしまう弊がある。」¹⁴⁾と述べている。第十軍参謀長が12月20日付けでその麾下の諸部隊に発した通牒には、「掠奪婦女暴行放火等ノ嚴禁ニ関シテハ見次訓示セラレタル所ナルモ、本次南京攻略ノ実績ニ徴スルニ婦女暴行ノミニテモ百余件ニ上ル忌ムベキ事態ヲ発生セルヲ以テ、重複ヲモ顧ミズ注意スル所アラントス」¹⁵⁾と記されている。陸軍省人事局長阿南惟幾（少将）も、1937年12月22日のメモに、「中島師団婦人方面、殺人、不軍紀行為は、国民的道義心の廃退、戦況悲惨より来るものにして言語に絶するものあり」¹⁶⁾と記している。東京にいた外務省の石射猪太郎東亜局長は、南京からの情報を伝え聞き、1938年1月6日の日記に、「南京に於ける我軍の暴状を詳報し来る。略奪、強姦、目もあてられぬ惨状とある、嗚呼これが皇軍か」¹⁷⁾と記している。この映画において、日本軍の残虐さ・横暴さを描いた場面がその大半を占めるのも、日本軍の実態が日本人自身が見てすら上記のようなものであることを考えれば、至極当然のことといえよう。

また、「角川正雄ら良心的な日本人について」「伊田修について」の項においても述べたように、この映画は、日本兵の人間らしさについても触れているわけであり、反日映画と呼べるような作品ではない。実際このことによって、監督及びこの映画は、中国において「日本寄りだ」との批判も受け、監督には殺害予告の脅迫状すら送られてきた¹⁸⁾という。

この映画のテーマについて、陸川監督自身が明確に語っている。「最初の考えは非常に簡単で、中国人が侵略に抵抗した映画を撮りたいと思った。……思いが芽生えてから制作を終えるまで、『南京！ 南京！』は4年を費やした。その4年の間、脚本は陸川が絶えず修正し、映画も侵略に対する抵抗から戦争、人間性に対する模索へと昇華していった。……この映画を通じて戦争における人間の本性と考え方を模索したいと考え、日本人兵士を人間として描いたのは必要な叙事的な手段だ。」¹⁹⁾、「反日映画を撮りたいんじゃない。人間性を失わせる戦争の極限状態を知りたい」²⁰⁾、「（この映画によって）戦争が（被害者だけでなく加害者の）人間性を損なうことを理解してもらえと思う」²¹⁾

陸川監督はまた以下のようにも語っている。「我々は過去、ほぼずっと大虐殺の事実を涙ながらに訴え続け、日本兵を妖怪変化に仕立てることを習慣としてきた。こうした映画を我々は60年にもわたり撮ってきたが、世界に影響を与えたり、南京大虐殺というこの事件に対する世界の認識にも影響を与えたりはしなかった。今後も彼らを妖怪変化に仕立てるのは無益だ」²²⁾ この映画が中国映画史上において有する意義が、ここからもうかがえる。

また、映画の英語による副題の意は、「生と死の都市」である。そして、この映画では、物語の終了後、下に名前と生卒年とが記された主要登場人物たちの古びた写真が出てくる。そこでは、ラーベ以外はみな虚構の人物であるにもかかわらず（この映画の登場人物のほとんどは、モデルがあっても実在はしていない人物である。）、まるで実在の人物であるかのように生卒年を記

されている。それによって彼らの人生・運命といったものを考えさせられる。これは、監督が、戦争というものによって翻弄された様々な人々の人生・運命を描こうとしたことの表れであろう。

戦争の中で人間性を失って残虐になった日本兵を描き、唐天祥や姜淑雲（あるいはラーベら外国人）といった人道のために尽力した人々の（自分の命も危ないという極限状態のもとでの）気高い行為を描き（売春婦江香君の行為も非常に気高い行為である。）、日本兵の人間性にも目を配り、戦争や日本による処刑・虐殺の横行するなか、死にあるいは生き残る中国兵（少年小豆子をも含む。）や犠牲になった女性たちをも描き、更には、戦争という過酷な環境のなか病死する日本人慰安婦をも描き、戦争という悲惨な環境の中で生死を含めた運命を翻弄される人々を描いた奥の深い作品といえよう。

南京大虐殺を扱った他の映画などとの日本軍・日本人描写の比較

ここで、『南京！ 南京！』を、南京大虐殺を扱った他の中国映画など（他国との合作や香港・台湾の作品やドキュメンタリーなどをも含む。）と比較し、その特色を明らかにしてみたい。

①『拉贝日记 (John Rabe)』2009（独仏中合作）との比較：

『拉贝日记 (John Rabe)』は中国もからんだ合作映画であるが、監督・脚本はドイツ人である。『南京！ 南京！』『拉贝日记 (John Rabe)』いずれも、むろん日本軍の残虐行為を描いているが、『南京！ 南京！』の方が日本軍の残虐行為をこれでもかこれでもかと数多くかつ強調して描いている。また、『拉贝日记 (John Rabe)』は安全区も中国の士兵を隠していた（もちろん人道的な目的のためだが。）とことをも描き、日本軍に付け込まれる隙が安全区にもあったことも明確にしているが、『南京！ 南京！』はそうした面をあまり描いていない。そうした面のみから言うと、『南京！ 南京！』の方が日本軍の不条理さ・残虐さを強調しているようにも見える。（もちろん、中国人監督の作品である『南京！ 南京！』の方が中国の他の抗日戦争ものの映画の影響を強く受けていることも、おそらくその原因の一つになっていよう。）

『拉贝日记 (John Rabe)』には、心の中では日本軍（朝香宮鳩彦親王）の残虐行為に賛成していないがそれに明確に逆らうことのできず残虐行為も心ならず行う小瀬少佐が登場するが、彼は端役にすぎない。一方、『南京！ 南京！』の描く角川は、端役ではなくこの映画の主演の一人であり、しばしば登場し大きく取り上げられていて存在感があるし、自分の命まで捨てて中国人をの命を救うといった実際の人道的な行為を行っている。したがって、『南京！ 南京！』の方が『拉贝日记 (John Rabe)』より日本軍の残虐さを強調して描いていると簡単に言い切ることはできない。これは、陸川監督が、単に日本軍の残虐行為を描くことではなく、極限状態のなかでの人間の行動を、そこで見ることのできるヒューマニズムをも含めて描くということに関心を強く向けていたためであろう。

また、『拉贝日记 (John Rabe)』最後の字幕には、「日本国内の右翼勢力は、今に至ってもなお

『南京大虐殺』を否定しようと企てている」(筆者訳)との文があるが、『南京！ 南京！』にそのような内容の字幕ないしナレーションは存在しない。

②『南京1937』1995(中香台合作。呉子牛監督)との比較:

中国人医師の妻である日本人女性を主人公に据え、彼らの目撃する日本軍の暴虐を描いた『南京1937』では、設定上、戦時における国籍を超えた夫婦愛・家族愛が見られるのが一つの特徴であるが、少なくとも日本軍人の「支那人」に対する行為は良識を欠いた横暴で残虐なもののみであり(ただし、『南京！ 南京！』の伊田ほどまでにいやみな日本人は登場していないようにも思われる。),『南京！ 南京！』の角川のような良心的な日本軍人は登場しない。

③『黒太陽 南京大屠殺』1995(香港。牟敦芾監督²³⁾)との比較:

主役たちを中心としたストーリー性のあるドラマという性格の強い『南京！ 南京！』『南京1937』などと比べ、『黒太陽 南京大屠殺』は、記録映画(事件再現映画)的な性格の強い映画である。『黒太陽 南京大屠殺』は、『南京！ 南京！』同様、日本軍による目を背けざるを得ないような血なまぐさい暴力・残虐行為(むろん女性に対する暴力を含む。)に満ち満ちており、一方、『南京！ 南京！』の角川のような良心的な日本兵は登場しない。『南京！ 南京！』のように日本軍の行為に心を痛める日本人大使館員も登場しない。(ただし、高山剣士が中島今朝吾第十六師団長のあまりにも残虐な行為に、さすがに正視できずその場を立ち去る場面はある。)『南京！ 南京！』で見られるような日本兵同士で過ごすのどかで平和な時間といったものも見られない。日本軍による目を背けざるを得ないほどの残虐な場面や(その横暴さを示す場面)が次々に繰り返される。日本軍の残虐・横暴な罪行に対する怒り・批判精神が非常に強烈に表れた作品である。

『黒太陽 南京大屠殺』においては、その最後に字幕が流れ、日本軍による殺人・強姦・略奪・放火がいかにひどいものであり、日本軍による戦争ではない組織的な「大虐殺」により、中国側が人的・物的にいかに甚大な被害を被ったかということ、主要な戦犯は戦後の軍事裁判でどうなったかということ、それにもかかわらず多くの戦犯が戦後民間に隠れたこと、などがその字幕に記されている。一方、『南京！ 南京！』では、中国人の日本に対する怒りをかき立てるようなそうした字幕(ないしナレーション)は存在しない。

④『五月八月』2002(香港。杜国威監督²³⁾)との比較:

『五月八月』は南京大虐殺という歴史的事件そのものを正面から描いた作品というよりは、南京の平和で幸せな家庭に育った五月と八月という二人の女の子が、日本軍の侵攻により両親を殺され(母親は日本兵たちに強姦された。),鎮江(南京から80キロほど離れている。)の伯父に引き取られてからも、戦争がそこまで広がり伯父も空襲で被弾して死に、彼女たちは伯父の家からも出なくてはならなくなる、そうした彼女たちが自ら体験し、またその目でも見た、南京などでの日本軍の残虐行為による一般民衆の苦しみ・悲しみを描いた作品である。家族愛が大きなテ-

マになった作品ともいえるが、日本軍の無辜の一般民衆に対する空襲、虐殺、強姦、などを数多く描いている。

南京大虐殺という事件を正面から描いた『南京！ 南京！』の方が、当然、日本軍の残虐な行為を数多く、また強烈に描いているが、しかし一方、『五月八月』に良心的な日本人は登場しないのに対し、『南京！ 南京！』には角川（や日本人大使館員）のような良心的な日本人も登場する。

⑤『張純如 南京大屠殺』2007（カナダ・香港合作。主要スタッフはカナダ人。）との比較：

南京大虐殺について心血を注いで調べて、ベストセラーとなる『THE RAPE OF NANJING』を著し、欧米で南京大虐殺に関心が払われるようになる契機を作ったアメリカ人華僑作家の IRIS CHANG（張純如）の人生を描くとともに、彼女が被害者その他へのインタビューなどを通して明らかにした日本軍の残虐行為を明らかにしてゆく作品。南京大虐殺当時の日本軍がいかに残虐な数々の行為をしたかを伝えている。そこには角川のように良心的な日本兵は（そして富田のように良心的な大使館員も）出てこない。

なお、現在過去の日本の戦争を反省する、ないし批判的にとらえる日本人の存在をも伝える一方、それ以上に、80年代以降もいかに多くの日本人が過去の戦争に無反省であるかを大きく伝えている。

⑥2008年に中央電視台によりゴールデンタイムに放送されたテレビドキュメンタリー『见证 南京大屠杀』（中共南京市委宣传部撮影制作，南京電視台制作請負）との比較：

『见证 南京大屠杀』も、専ら日本軍・日本兵が残虐・暴虐な行為を数多くしたことを明らかにしているだけで、『南京！ 南京！』とは異なり、良心的な日本人士官・日本人兵士・日本人大使館員などの存在には触れてはいない。

なお、日本人の証人も登場し、日本軍が残虐・暴虐な行為をしたことを証言している。彼らはおそらく自らないし日本の過去に対する反省から証言してくれているのであろうが、そうした彼らの思いは、収録されたインタビューにおいて、たいていの場合、触れられることはない。収められた彼らの証言からは、日本軍がかつていかに残虐な行為をしたかということが伝わってくるだけで、過去を反省している日本人がいることはあまり強くは伝わってこない。むしろ、戦後も現在に至るまで多くの日本人が過去の侵略戦争に対し無反省だということが強く伝わってくるように思われる。

⑦1997年に遼寧教育音像出版社が制作した全20集テレビドキュメンタリー『中国抗日战争纪实』第5集「南京大屠杀」との比較：

『中国抗日战争纪实』第5集「南京大屠杀」も、専ら日本軍・日本兵が残虐・暴虐な行為を数多くしたことを明らかにしているだけで、やはり『南京！ 南京！』とは異なり、良心的な日本人士官・日本人兵士・日本人大使館員などの存在に触れてはいない。

『中国抗日战争纪实』第5集「南京大屠杀」は、過去を反省する現在〔1997年頃〕の日本人の存在に触れることもしていない。そして、「(南京大虐殺の)規模の大きさ、持続期間の長さ、殺害された人数の多さ、殺人方法の残虐さは、人類文明史上まれに見るものである。第二次世界大戦の終結からすでに五十年余り経ち、南京大虐殺からすでに六十年経った。不幸なことに、日本の軍国主義の亡霊が存在し、南京大虐殺の事実を否定する日本人すらいる。しかし、この中国人の心に刻まれた歴史は消し去ることのできぬものであり、決して彼らを許すことはないのである。」とのナレーションで終わっている。

以上のドラマ映画やドキュメタリーと比べても、『南京！ 南京！』における良心的な日本人角川や富田の存在は特筆すべきものと言うことができよう。

また、『南京！ 南京！』では、冒頭にも最後にも、今日（戦後から今日にかけて）の日本人がかつての侵略戦争に対し無反省であるということをあえて伝えようとするような字幕やナレーションなどは見られない。①③⑤⑥⑦に、今日（戦後から今日にかけて）もかつての侵略戦争に対し無反省な日本人がいることを伝えようとするような場面、字幕ないしナレーションがある（ただし、③の場合は、正確に言うと、多くの戦犯が戦後民間に隠れたとの内容の字幕であるが。）ことからすると、やはり今日の日本人がかつて侵略戦争に対し無反省であるということを伝えようとする部分がないということも、『南京！ 南京！』の一つの特色であるといえよう。

注

- 1) 『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』第47巻第1号2010年7月
- 2) 『『南京！ 南京！』役決め：小豆子一枚の写真がもとに』人民網日本語版2009年4月23日
- 3) シネマトゥデイ映画ニュース 2009年9月22日
- 4) 「シネマトゥデイ」2009年9月22日によると、日本でも公開される（おそらく2010年）ことになったと陸川監督が述べているが、少なくとも2010年9月上旬の現在においてはまだ公開されていない。
- 5) 厳密に言うと、例えば、日本軍が武力を盾にして安全区の人々を脅し、安全区にいる女性を慰安婦として差し出すことを要求した際、姜淑雲の表情や語気には憤りと悔しさが満ちていたが、それは極めて例外的な場面と言えるし、またこの場面にしても、日本軍の理不尽なまでの横暴さを考えると、姜淑雲の表情や語気は至極当然のものと思われる。
- 6) なお、当時、大使館には「富田」という名の大使館員はおらず、「富田」は実在の人物ではない。
- 7) 『南京の真実』ジョン・ラーベ著、エルヴィン・ヴィッケルト編、平野卿子訳、講談社、2000年。1937年12月28日についての記載
- 8) 『南京事件資料集 ①アメリカ関係資料集』南京事件調査研究会編訳、青木書店、1992年、258ページ
- 9) 『南京事件の日々』ミニー・ヴォートリンの日記、岡田良之助・伊原陽子訳、大月書店、1999年。1937年12月18日についての記載
- 10) 産経新聞2007年2月24日夕刊に載った産経新聞福島記者の質問に対する監督の言葉
- 11) シネマトゥデイ映画ニュース2009年9月22日
- 12) この映画では、1938年に入ってから〔映画の登場人物である姜淑雲、唐天祥、周梅曉、江香君、百合子ら

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (2) 『南京！ 南京！』

の卒年は、1938年ということになっている。], しかも、それもラーベが南京を離れた日〔史実では1938年2月23日〕より後に、式典が行われているようなので、史実と食い違っている。この場面は、やはりその点から言っても、史実のままではないといえる。

- 13) 『南京戦史資料集2』南京戦史編集委員会編纂, 偕行社, 1993年, 142 ページ
- 14) 『岡村寧次大将資料 (上)』原書房, 1970年, 291 ページ
- 15) 『天皇の軍隊と南京事件』吉田裕, 青木書店, 1986年, 157 ページ
- 16) 『南京事件』〔秦郁彦, 中公新書, 増補版2007年〕172 ページに引く阿南資料
- 17) 『外交官の一生』石射猪太郎, 読売新聞社1950, 中公文庫1986
- 18) シネマトゥデイ映画ニュース2009年9月22日
- 19) 「中国網日本語版」2009年9月24日
- 20) 2006年末, 産経新聞福島香織記者によるインタビューで。産経新聞2007年2月24日夕刊・2009年6月21日朝刊
- 21) 上海での日本人向け上演会後の交流会で。共同通信2009年5月23日
- 22) 「中国網日本語版」2009年9月24日
- 23) 大陸では上演されていないが, VCDやDVD等で見ることにはできた一むろん今でもできる一し, ネット上などで見ることもできる。
- 24) 大陸では上演されていないが, VCDやDVD等で見ることにはできた一むろん今でもできる一し, ネット上などで見ることもできる。